

○笠井委員

日本共産党の笠井亮です。

我が党は、今回の協議が、六者会合が共同文書を採択したことについて、志位委員長の談話を発表しました。朝鮮半島の非核化の実現というのが、日本を含む北東アジアの平和と安定にとって、また核兵器廃絶という唯一の被爆国日本の国民的願望にとって極めて重要な意義を持っている。そして、北朝鮮の核兵器とその開発計画の放棄に向けた最初の具体的一步として歓迎するものであります。

この共同文書は、昨年十月の北朝鮮の核実験強行に直面して国際社会が一致して求めた外交的、平和的な解決の方向に沿って、関係各国の忍耐強い交渉を通じて実現された重要な前進であるというふうに考えております。

北朝鮮と関係国は、〇五年の共同声明の初期段階の措置と位置づけられたこの合意を着実に実行して、そして共同声明を全面的に履行することが求められていると考えます。

さらに、共同文書が日朝国交正常化を含む五つの作業部会の設置を決めて、その実施のための協議の場がつくられたということは、北東アジアの地域の平和と安全にとって重要な一歩だろうと私も考えます。

そこで、官房長官に伺っておきたいと思いますが、先ほど来出ております共同文書の中で、日朝両国が「平壤宣言に従って、不幸な過去を清算し懸案事項を解決することを基礎として、国交を正常化するための措置をとるため、二者間の協議を開始する。」というふうに明記していることとのかかわりです。

日本政府がやるべき役割といいますか努力すべきことの中身なんですが、私たちは、日本政府が、日朝平壤宣言に基づいて、拉致、過去の清算を含む二国間の懸案の解決と、それから国交正常化のための真剣な努力を行っていくこと。そして、この努力を、六カ国協議における朝鮮半島非核化のために課せられた役割への誠実な取り組み、これと結びつけていくということが非常に大事だと思うし、政府に希望するわけなんです。

官房長官、日本政府による努力と取り組みという点で、今申し上げたような二国間の懸案事項あるいは国交正常化のために真剣に努力していくということと、それから、六者会合における朝鮮半島非核化のために課せられた役割に誠実に取り組んでいく、これを結びつけてやっていくんだ、いろいろあるけれども。そのことの重要性と必要性について、どういった認識をお持ちかどうかということについて伺いたいと思います。

◆塩崎国務大臣

先ほど麻生外務大臣からお話がありましたように、昨年十月に北朝鮮は核実験を行いました。その前にはミサイルの実験も行っておりますけれども、そういう状況を踏まえて、やはり非核化を行う、完全な非核化を行うということがおととしの共同声明にも書かれ、そして、それを改めて完全実施をするということで今回の二月十三日のこの合意に至っているわけでございます。

その中で、日朝間のさまざまな懸案事項について解決をしなければいけないということも同時に書き込まれ、五つの作業部会ができた。この作業部会は、非核化というのがまず第一にあって、あと米朝、日朝、経済、エネルギー協力、そして北東アジアの平和と安全、こういうことで、全部を一遍にやらなきゃいけないというのは、先ほど答弁したとおり、それぞれの作業部会、それぞれのスピードでいったとしても最後は同時に出口でまとまらないといけませんよ、こういうことだろうと思うんです。

したがって、我が国としては、今回初期段階の措置をとるとともに次の段階で何をやるのかというのは、実は完全な非核化に向けてのリストを出して、そしてこれを全部放棄してもらわなければいかぬ、こういうことに至るまでに我々はこの間に日朝の問題についても解決を図る。その中心が拉致問題であり、それが入り口であって、これを解決しない限りは日朝の国交正常化の話はあり得ない、こういうことだろうと思いますので、米朝の作業部会には多分日本からは参加をしないいんでしょうが、その他にはすべて参加をして議論をしていくという中で、日本の問題と全体の問題との有機的な結合の中で全体を解決していこう、こういうことだろうと思います。

○笠井委員

有機的な結合と言われましたが、大いにそういう観点で取り組みと努力をしていただきたいと思います。終わります。

.....

○笠井委員

日本共産党の笠井亮です。限られた時間ですので、直接交渉に当たられた佐々江局長に幾つか伺いたいと思います。

先ほど大臣質疑でも述べましたが、私たちは、今回の合意について言いますと、北朝鮮の核兵器と、そしてその開発計画の放棄に向けた最初の具体的な一歩として歓迎をいたしております。また、朝鮮半島の非核化だとか、あるいは日朝の国交正常化を含めた五つの作業部会、この設置が決められて協議の場が設けられたということは、北東アジアの平和と安全にとって重要な一歩だと考えております。

今回の会合の中で、日朝間でも、一時間弱ではあるけれども話し合いの場があったということも聞いておりますが、それを含めて、交渉に当たられた局長は、今回の結果を全体としてどういうふうに見ておられるか、現場でいろいろやられて。交渉ですから、いろいろまた言える範囲があると思うんですが、率直な感想、あるいは御苦勞も含めて、この結果をどう見ておられるか、伺いたいと思うんですが、いかがでしょうか。

◆佐々江政府参考人

今回の協議の結果につきまして、これが果たして将来にどの程度つながっていくのかということについて現時点で確たることを言える者は、私は六者の代表、いないと思います。しかしながら、今回の会合で、もし意味があるとすれば、二つの点で大きな意味があったというふうに思っております。

一つは、非核化に向けたこの目標に向けて、北朝鮮がある一定の措置をとることを、具体的な形で約束したということでございます。

御承知のように、一昨年共同声明では、非核化をするということは目標としてうたっておりますし、それは約束であるわけですが、それを具体的にどういうふうな手順でやっていくかということについては、これまで一切合意がなかったということですが、今回、そのより具体的な手順の大枠について、それも最初の、初期のステップについて合意をしたということでありまして、そういう意味では、この最終的な非核化に向かう上での第一歩を今回の合意で踏み出しつつある。

しかしながら、この第一歩ですら、三十日、六十日という今想定されておりますスケジュールの中で、これが実施されないと、単なる絵にかいたもちであるということになると思いますので、まず、これが合意されたとおりに実施されることを確保するのが第一であるというふうに思います。

しかしながら、これは仮に実施されたとしても、最終的な非核、完全な朝鮮半島の非核化に至るためには、さらなる最終的な次のステップの努力が必要だということで、正しい方向には向かっているとはいえますけれども、これはこの最初の一歩にしかすぎない、そういうふうに思っております。そのためには大変な努力がまだまだ必要だというふうに思っております。

それから、二番目の点としては、先ほど来から御議論のあります日朝関係、特にこの日朝間の懸案を解決して国交正常化に至る、この点については何年にもわたって日朝間で協議も行われましたし、努力も行われましたけれども、いまだ最終的な道筋、ゴールにたどり着いていないということは遺憾なことに思っております。

御承知のとおり、去年の春に日朝の交渉を並行協議ということで再開して、それ以降日朝間ではまともな交渉、対話が行われていなかったということですが、我々から見ますと、これは、北朝鮮の方がミサイルを発射したり、あるいは核実験をしたりということで、国際社会全体として対話をする機運にもなかつたし、また当然のことながら、日朝間ではそういうことはなかつたわけですが、ここに来て、北朝鮮がいろいろな形で、国際的な圧力のもとで、やはり交渉のテーブルに着くことを決めたかに見える。決めたかに見えるという意味は、果たしてこの交渉において、北朝鮮がど

の程度正面からこの懸案の解決も含めて解決する決断をしてやってくるのかは、交渉の中で検証していくしかない問題であるというふうに思っておりますし、その中で解決するように、あるいは進展するように、全力を尽くすのが我々の役目であり、責務であるというふうに思っております。

そういう意味で、今回の合意によりまして、日朝間で閉ざされていたと申しますか、中断していた交渉が再開することになる、そのこと自身は今までの状況から見れば一歩前進だと思いますけれども、まだ交渉も始まっていないところで、この点について、必ずうまくいくというようなことを申し上げるほど、現時点では楽観的になれる情勢でもないことも明らかであるというふうに思います。

しかしながら、そういう機会がある限りにおいて、我々は全力を尽くすべきだというふうに思っております。

○笠井委員

今二つの点にわたって言われたわけですが、最初の部分でいきますと、朝鮮半島の非核化に向けてということで、最初の具体的な一歩という意味での大事な、そういう意味ではあったけれども、これからだと。そして、その全面的な履行があるし、それを強く相手に対して求めていくということでありましたが、その朝鮮半島の非核化という一歩踏み出した問題について、全面的に履行していくという点で、特に日本政府としては、どういうイニシアチブをこれからやっていく、果たしていくかということが大事だというふうに、交渉に当たられている立場からいって、感じていらっしゃるでしょうか。

◆佐々江政府参考人

朝鮮半島の非核化にせよ、日朝の懸案の解決の上に立った正常化にせよ、あるいは米朝の懸案の処理を含めた正常化にせよ、最終的には朝鮮半島を含めた北東アジアの平和と安全の確保、これは日本も含みますけれども、そのことが最終的な目標であることは明らかでございまして、そのために一つの絵姿、目標を描いたのがこの六者の共同声明である、今回の合意というのは、その第一歩をしるしたものであるという位置づけであるというふうに思います。

したがって、その中にある各作業部会において、日本としては、まず非核化についてやはり北朝鮮が約束したことを実施するように、あるいは具体的に今後非核化作業部会の中で、今回の合意をさらに詳細に専門家の間で詰めていく作業というものが想定されているわけでございますが、それに積極的に参加をして、特に米国は核兵器国でございますから、核兵器国としての知見を我々と十分に共有してもらいながら、交渉の中身を詰めていく作業に積極的に参加していくべきだというふうに思っております。

他方、その間、日朝の作業部会におきまして、当然のことながら最大の懸案である拉致問題、同時に国交正常化問題も含めて、北朝鮮と正面に向き合ってやはり交渉をすることによって前進をしたいというふうに思っております。

そしてまた、ほかの作業部会におきましても、特に北東アジアの将来の平和と安全のメカニズム、こういう問題につきましても、やや少し遠い将来の話でございますけれども、日本としての考え、あるいはビジョンを持ってその協議に積極的に臨んでいきたいというふうに思っております。

また、先ほどのエネルギー、経済作業部会にしましても、日本は当面この具体的な支援には参加しませんけれども、この全体の流れ、議論がどういうふうに行われているのかということについて、我が国がフォローしないということはありませんというふうなことはあり得ないということだというふうに思っておりますし、これについても参加をして、我が国としての立場あるいは考え方を、所見を述べていくべきだというふうに思っております。

○笠井委員

日朝問題の今回の会合の中で、日朝間の問題解決が改めて六カ国が取り組む全体の課題に位置づけられたというのは、非常に大事な点だというふうに思うんですね。

その点でいきますと、日本政府に対して、やはり拉致や過去の清算を含めた二国間の問題を解決する、そして国交正常化するために真剣に努力すると同時に、その努力がやはり六者会合、今局長も言われましたけれども、の中での朝鮮半島の非核のために課された役割に対する誠実な取り組みと結合させて、大いに努力をしていただきたいということを強く求めておきたいと思っております。 終わります。